

2025年1月号（通巻188号）

山正ニュース



山正公式LINE 友達募集中！
お得なキャンペーン情報はこちらより↓

株式会社 山正
YAMASHO
<https://yamasho.style/>



§1 2025年は「再構築」

新年明けましておめでとうございます。
令和7年の皆様方のご健勝とご多幸を祈念します。

2024年は、日本をはじめ、英国、EUを含めて世界各国のリーダーの交代が相次ぎました。米国の「またトラ」の動きも気になるところです。国内においては、少数与党となり、一方的な結論ありきではなく、様々な議論がなされることには期待です。しかしながら、局所での紛争は絶えず、平和にはほど遠い世相となっています。日本経済もデフレからインフレへの転換が必ずしも良いことばかりではないと思われ、人手不足、賃金上昇への対応も含め、経営・生活していくことが難しい時代になりつつあると感じております。

令和6年は、元日の能登地震から始まり、南海トラフ地震臨時情報の発令、局地的な豪雨災害、時季外れの短時間豪雨と、「防災」を意識せざるを得ない自然の猛威に踊らされました。また、相変わらずの猛暑に、長引いた残暑と、地球温暖化の現象が如実に表れた年でもありました。米の作況指数は例年並みとの報道もありましたが、現場では白未熟の発生やイネカメムシの被害の多発が見受けられました。また、果樹カメムシ類の発生が多く、畑作においてはヨトウムシの異常発生等、暑さのせいか虫の大発生や季節外れの害虫での被害が多かったようです。遮熱や遮光対策、品種の選定、栽培時期や栽培方法の再検討、薬剤抵抗性病害虫への対応等、農業現場では現実の気象や環境に合わせた対策がますます必要かつ重要になると思われます。

農業業界は、金額ベースでは、殺虫剤の伸長と値上げ分も含め、例年並みの実績でありましたが、物量ベースでは確実に減少傾向にあります。また、物流の2024年問題はこれからが本番を迎えます。農業だけではなく、肥料や培土、農業資材の配送に関しては、年度末に向けてはかなりの混乱を来たすのではないかと推察されます。使用時期が限定される農業資材においては、早めの確保・予約の徹底と在庫機能が重要になってきます。ある程度の年間予約の確保の上で、当用時の効率よい小口配送の仕組みを、お客様にもご理解を得ながら、業界全体で考える時かと思えます。

昨年5月には、農業をとりまく情勢（少子高齢化による農業の担い手不足、気候変動による自然災害の多発や栽培適地の変化、栽培面積の減少による生産基盤の脆弱化、SDGsへの対応等）に合わせ、四半世紀ぶりに「食料・農業・農村基本法」の改正が行われました。基本方針として、1)「食料安全保障の確保」、2)「環境と調和のとれた食料システムの確立」、3)「農業の持続的な発展」、4)「農村の振興」が謳われています。このような環境下、山正として貢献できる事業として、「環境との調和」と「担い手不足」への対応が挙げられます。「環境との調和」においては、「総合防除」という新しい定義のもと、化学農薬・化学肥料の削減や、BS剤、有機質肥料の活用等、地域に適した環境保全・環境再生型農業への提案、最適な農薬・肥料・資材のご提供に取り組まさせていただきます。また、「担い手不足」対策では、スマート農業への取組支援や請負防除での助っ人サービスに取り組めます。山正として、農家様をはじめ、緑化事業に係る人々の収益向上のために、あらゆる形で貢献をしていきます。



今年のキーワードは「**再構築**」です。

デフレからインフレへ時代の変化に合わせ、いかに環境に適合して進化を遂げるかが重要になります。そのために、今までの仕組み、制度を今一度見直し、継続すべきこと、改善すべきこと、廃止すべきことを見極め、新たな行動で、周りの皆様に貢献することを推し進めていきます。山正の経営理念である「絆(きずな)経営：みんなの幸せのための、環境(まち)づくり人財(ひと)づくり」を、4つの行動指針「自働」「協働」「即行」「感謝」で、「再構築」の年を乗り切ります。引き続きの、ご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願ひします。

2025年1月
株式会社 山正
代表取締役 堅田充宏

§2 第10回「飛騨農の会」を開催

2024年11月13日(水)に、高山市のマウントエースにおいて、第10回の「飛騨農の会」を開催いたしました。農薬・肥料・資材メーカー40社に出展いただき、370名を超えるお客様にご来場いただきました。

今年も猛暑であったことから、猛暑対策資材の紹介を多くしました。特にドローンによる遮光剤の散布デモの紹介は、多くの方に興味をもってもらいました。また、昨年より会場を広くし、トマトなど果実用の選果機や作業台車の実物も展示し、実際に手に取って見て頂きました。さらに、昨年より本格販売させていただいている「Yamasho Style」商品も展示し、農薬混用型散布微生物の「トマトの盾」や、太陽熱と還元消毒のダブルの効果を実現した「パーフェクトハイブリッドZ」など、使用していただいたお客様からの感想をお聞きすることができました。これらのご意見を踏まえ、次の商品開発に役立たせてまいります。まだまだ不十分な点もありますが、来年以降もより良い展示会を開催できるよう精進させていただきます。ご来場いただいた皆様、ご協力いただいた関係各位に改めて感謝申し上げます。

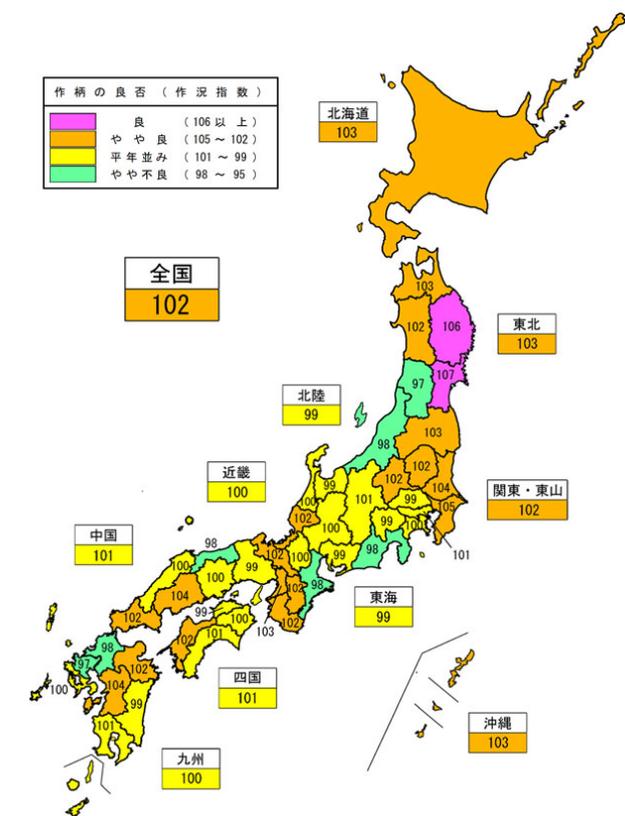


§3 24年度産稲作・作況指数102、「1等米」比率77.3%

24年10月の農水省からの発表では、24年度産稲作の作況指数は102とやや良でありました。また、水稻うるち玄米の1等米比率は、9月末時点で77.3%であり高温の影響を大きく受けた昨年同時期を17.7ポイント上回り、平年並みとなりました。今年の夏も気温が高い日が続いたものの、昨年よりも雨が多く、稲の負担が減ったほか、追肥の強化や田を冷やす水管理など農家による高温対策が効果的に行われた結果だとしています。

特に、昨年1等米比率が低下した主産県で大きく回復し、新潟県は70.5ポイント増の84%山形県は40.3ポイント増の95%秋田県は29.4ポイント増の92%北陸地方も8割以上となりました。高温耐性品種では、新潟「新之助」が99.4%秋田「サキホコレ」が99%山形「つや姫」が98.3%、富山「富富富」が98.3%などと、100%近い水準を確保した品種も目立ちました。

一方、西日本での一等米比率は厳しい結果となってい



ます。東海地方では前年度よりも悪化した県が多く、静岡県では、25.1ポイント減の55.3%、岐阜県は8.3ポイント減の34.6%、三重県は5.9ポイント減の25.7%、愛知県は0.9ポイント増と唯一回復したものの21.7%と最低となっています。高温による白未熟粒の発生もありましたが、今年発生が非常に多かったカメムシの加害による斑点米が大きく増加した地域もありました。

近年では気象条件や病害虫の発生タイミング、発生量は変遷しており、地域に合わせた対策を講じる必要性が高まっていますので、各地域の情勢を踏まえた栽培や防除が重要になると考えられます。

府県名	2024年度(%)	
	2024年度	前年比(対)
新潟	84.0	70.5
秋田	92.0	29.4
山形	95.0	40.3
静岡	55.3	▲ 25.1
富山	91.1	34.3
石川	88.7	9.1
福井	90.2	5.2
岐阜	34.6	▲ 8.3
愛知	21.7	0.9
三重	25.7	▲ 5.9
滋賀	61.1	3.7
京都	71.0	8.3
全国	77.3	17.7